様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２３日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２００５４
研究課題名（和文）　法相宗所伝のインド瑜伽行派諸論師の系譜の再考

研究課題名（英文）　Reconsideration on the Lineage of Indian Masters of the Yogacara School according to the Faxian School.

研究代表者
佐久間　秀範　（SAKUMA HIDENORI）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：90225839

研究成果の概要（和文）：研究期間内に以下の三つのプロジェクトを完成させた。１．『大乗荘厳経論』第三章、第六章、第十九章の偈頌（サンスクリット語、チベット語訳、漢訳）、世親釈（サンスクリット語、チベット語訳、漢訳）、無性釈（チベット語訳）、安慧釈（チベット語訳）の対照テキスト。２．研究チームで五姓各別のインド、中国、韓国、日本の総合研究。３．研究チームで玄奘訳『仏地経論』全体の日本語訳（日本初）の吟味。

研究成果の概要（英文）：During this period, I accomplished the following 3 projects: 1. The comparative texts of the Mahayanasutralamkara Chapter 3, 6, 19 with the Verse (Sanskrit, Tibetan translation, Chinese translation), the Vasubandhu's (Sanskrit, Tibetan translation, Chinese translation), the Asvabhava's (Tibetan translation) and the Sthiramati's (Tibetan translation) Commentaries. 2. The study on the 5 Gotra system among Indian, China, Korea and Japan collaborated with the investigating team-members. 3. The examination of the Japanese translation (first translation in Japan) from the Xuanzang's Chinese translation of the Buddhabhumivyakhya collaborated with the investigating team-members.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、印度哲学・仏教学
キーワード：仏教学・仏教史全般、瑜伽行唯識思想、『大乗荘厳経論』、『仏地経論』、五性各別の思想、安慧

１．研究開始当初の背景

研究代表者は永年に亘り、転依思想、識と智の結合関係、五法と三身の結合関係、五姓各別の成立に関する研究を行ってきた。その過程で、近現代の仏教史の中で考えられてきたインド瑜伽行派の諸論師の系譜が、伝承伝説によるものであって、事実関係に反するものではないかと考えるようになった。そして影響力の大きかった伝承が法相宗の伝える系譜ではなかったかと考えるに至った。一例を示すと以下のごとくである。アーラヤ識等の八識と大円鏡智等の四智とが転依を契機に結びつくことを採り上げると、これを扱う『大乗荘厳経論』の偈文や世親釈、無性釈に

は存在せず、安慧釈で見られること、『摂大乗論』の無性釈のチベット語訳になく玄奘訳無性造『摂大乗論釈』に見られること、玄奘の師とされる戒賢の『仏地経論』チベット語文献ではアーラヤ識―大円鏡智、染汚意（マナス）―平等性智の関係のみで、他の二智については関係を結ぶ途上にあること、一方玄奘訳親光等造『仏地経論』には明示されていることが実証される。しかもその結合関係はインド思想からは意識―成所作智、五現識―妙観察智が理に適っている。その事実はプラバーカラミトラ訳『大乗荘厳経論』、玄奘訳無性造『摂大乗論釈』の元来の翻訳がこれに則ってることから判る。これに対し玄奘は『仏地経論』翻訳の際に意識―妙観察智、五現識―成所作智に逆転させた事実も明確になっている。玄奘が逆転させた理論とは、法相宗が正当とする八識と四智の結合関係である。この関係をインドで明示するのは安慧釈『大乗荘厳経論釈』チベット語訳である。法相宗では安慧は玄奘（護法）と対立する論師とされている。

また、五姓各別思想はインド、チベットはじめ東南アジアに至る仏教圏で扱われた形跡がない。ことの発端は中国に帰国した玄奘が翻訳した『仏地経論』である。玄奘以前に翻訳された真諦訳『摂大乗論』などが如来蔵思想に偏向され、悉皆成仏思想に中国で傾いて翻訳され、それがもとで真摯に修行実践を行う気運が薄れたことへの警鐘として、全く救われることのない無種性を第五番目にもつ五姓各別が登場したと考えられる。このことは平成２０年９月に行われた日本印度学仏教学会のパネル「五姓各別思想は本当に差別思想か ―インド～中国～朝鮮～日本の視点から―」（代表者：佐久間秀範）である程度明確になった。この思想の源流をインドに辿ると瑜伽行派文献に限らず如来蔵文献も含めた諸文献に、一つには三乗思想、もう一つには日常実践的意味合いで成仏できる種姓とできない種姓を説く記述が併存していることが判る。それらの要素が次第に五つの種姓としてシステム化される過程は『大乗荘厳経論』偈文と世親釈、無性釈、安慧釈の順番で見て取ることができる。戒賢の『仏地経論』にはこの関係は見られない。再度提示すると法相宗では安慧は玄奘（護法）と対立する論師とされているのである。

さて護法説が法相宗の正義であるとする伝承からみると、法相宗が主張する八識と四智の結合関係や五姓各別は護法の思想でなければならない。ところが護法の著作と伝わるのは玄奘や義浄等の翻訳した漢訳にしか見られない。戒賢が護法説を本当に踏襲しているなら、上記の事実は何であろうか。護法の思想を知る手がかりはどこにあるのであろうか。さらに安慧が護法（玄奘）と対立する論師であると現代仏教学では考えている向きがあるが、この伝承は中国はじめ諸文献には確認できない。文献を精査する限り、むしろ玄奘の思想は安慧作と伝わる文献の内容に近いのは何故であろうか。『大唐西域記』などの伝承からすると、玄奘は戒賢より勝軍（ジャヤセーナ）の影響が強い可能性が浮上する。勝軍は「從安慧菩薩學聲明大小乘論。又從戒賢法師學瑜伽論。」（『大唐大慈恩寺三蔵法師傳』）とあるように、安慧と戒賢に師事している。残念ながら文献的に事実関係の確証を得ることは難しい。

以上の研究成果から浮かび上がる諸論師の系譜について再考を進めるために、論師の系譜を着実に追うことにできる『大乗荘厳経論』偈文と世親釈、無性釈、安慧釈の対照テキストを作成することが極めて有用である。代表者は別なテーマでやはりこの対照テキストを作成したが、その経験からも対照テキストに基づいた内容分析の重要性には疑いの余地のないことを確信するに至った。

そこで前回の科研費研究課題（『大乗仏教瑜伽行派の唯識観が外界を否定するものではなく実践理論であることの解明』、基盤研究(C)、2005～2007 年度）で完成させた『大乗荘厳経論』第九章、第十一章、第十八章の対照テキストに加えて第三章、第六章、第十九章の対照テキストを完成させることにより、他のプロジェクトで研究されている、第一章、第十三章、第十四章を加えて、難解な『大乗荘厳経論』の読解をし易くすることができると考えられた。さらに五姓各別について『大乗荘厳経論』第三章や『仏地経論』のほかにこのテーマを扱うテキストを研究チームで共同研究することにより、五姓各別のインド、中国、韓国、日本の総合研究を行う必要性を感じていた。これらの研究で要となる玄奘訳『仏地経論』全体の日本語訳（日本初）の吟味を研究チームで丹念に行うことが、これまでに行われてこなかった経緯も含めて、大変重要であると感じていた。

２．研究の目的

中国と日本の法相宗が描いてきたインド瑜伽行派の諸論師（弥勒、無着、世親、無性、安慧、護法、戒賢、陳那、etc.）間の師弟関係や系譜が、文献に実際に表明される思想内容を精査すると、実は矛盾に充ちたものであることが判る。本研究の全体構想は、系譜等を思想内容から辿るために有効な論拠となる『大乗荘厳経論』対照テキストを作成し、作成されたテキストを論拠として東アジア仏教の専門家と内容の分析を行うことによって、諸論師間の事実関係を浮き彫りにすることにある。そのために以下のような具体的な目標を定めた。

(1)『大乗荘厳経論』第三章、第六章、第十

九章の偈頌（サンスクリット語、チベット語訳、漢訳）、世親釈（サンスクリット語、チベット語訳、漢訳）、無性釈（チベット語訳）、安慧釈（チベット語訳）の対照テキストを完成させること。総打ち込みデータは膨大であるが、前回の作業の中、第十八章を手がけた筑波大学大学院博士課程岡田憲尚氏の驚異的なスピードと細部に亘る綿密さに期待し、全体の対照テキストの入力を依頼した。これが完成すれば他の研究グループによる第一章の入力、岩本明美氏の第十三章、第十四章の入力データと合わせて、ほぼ重要な章は網羅することに成る。これらによって、一つにはサンスクリット原文の発見されていない『大乗荘厳経論』安慧釈の原文の予想の下準備を始めることができる。現在発見されている安慧の著作のサンスクリット原文との対比をする中で、チベット語訳のミスである可能性を最大限に想定しておく土壌を造ることができる。それによって諸論師の中でも不安定要素の強い安慧を諸論師の系譜の中でどのような位置づけをすることができるか、一歩近づくことができると考えた。

(2)インド・チベット・中国、韓国、日本の専門家による研究チームでインド、中国、韓国、日本の五性各別の思想の内容を相互に検討し合う中で、玄奘の『仏地経論』の特徴的な記述が、どのような経緯で生み出されてしまったかを、ある程度の正確さで想定することを目指した。

(3)インド・中国、韓国、日本の専門家による研究チームで玄奘訳『仏地経論』全体の日本語訳（日本初）の吟味。五性各別の思想に限らず、四智と八識の関係も含めて、玄奘のインド留学中のインドにおいて、どのくらい観念論的傾向を持っていたかを考える指標として、仏教論理学系統の自証分、証自証分などの混入の経緯などを精査することを目的の一つとした。そのために玄奘訳『仏地経論』の内容の解読が不可欠であると予測した。

３．研究の方法

(1)テキストのデータ打ち込みとその内容を吟味しながら対応する箇所を貼り合わせる地道な作業によって、かなり多くの分量をひたすらにこなす方法をとる。

(2)五性各別の思想に関して、各専門分野における研究成果を持ち寄り、２月に一回東大のミュラー研究室で研究会を行い、メンバーの専門領域における成果を持ち寄って、意見交換の形で全体の流れを吟味してゆく。

(3)２月に一度程度定期的に研究会を行い、玄奘訳『仏地経論』の書き下し文を用意して、それを漢文としての理解と対応するチベット語訳と合わせることで、日本語としてどのように理解すべきかを考察する。

４．研究成果

今回の科研費の研究期間内に上記の目的は達することができた。

（１）まずは『大乗荘厳経論』第三章、第六章、第十九章の偈頌（サンスクリット語、チベット語訳、漢訳）、世親釈（サンスクリット語、チベット語訳、漢訳）、無性釈（チベット語訳）、安慧釈（チベット語訳）の対照テキストを岡田氏一人で完成させたことは驚異的なことである。この対照テキストはこの分野の研究者の間で期待されている。しかし、前回そのまま公開したために、この成果によって博士論文を用意していた大学院生の研究とともに発表するより先に、別な研究者から早速に論文が提出されてしまった。今回はそのようなことにならないように、研究部分と合わせて一般公開することにしている。

（２）五姓各別についてはメンバーそれぞれに個々の論文で発表している。そこでこれまで唯識思想というとこれが旗印のように思われてきた常識が修正されることを期待して、今回の研究会の成果を、五性各別の思想のインドから中国、韓国、日本に至るまでの総合的な内容の共著として出版することを計画している。

（３）『仏地経論』の書き下し（日本語訳）は日本初であるので、どのように漢文の文脈を読むべきかの指標となる。それだけに出版にはまだ細部に亘って吟味する必要が感じられるので、もうしばらく作業を続けることにしている。その吟味の過程で、別に個人的に作成中であるチベット語訳と漢訳との対照テキストも何とか出版に至るようにしたいと思っている。この対照テキストは日本以外の研究者からも再三早期の出版を望まれている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３８件）

①佐久間　秀範、‘The Historical Development of the *Āśrayaparivṛtti* Theory’, in *Saṃbhāṣā* (Nagoya Studies in Indian Colture and Buddhism) 29, 2011, pp.39-59、査読有

②Albert C. Muller, “An Inquiry into Views: Lessons from Buddhism, Behavioral Psychology, and Constructivist Epistemology.” Global Forum on Civilization and Peace: Beyond National Boundaries: Building a World Without Walls. Seongnam-si, Korea: Academy of Korean Studies Press, (October, 2011), p. 159–201.査読有

③Albert C. Muller, “Woncheuk 圓測 on Bimba

本質 and Pratibimba 影像 in his Commentary on the Saṃdhinirmocana-sūtra." Indogaku bukkyōgaku kenkyū 印度學佛教學研究 59–3. (March 2011): 198–206.査読有
④橘川　智昭、「唯識三転法輪説が想定した初時有教の意義 —『解深密経』・円測『解深密経疏』を手がかりとして—」『印度学仏教学研究』第 59 巻第 2 号、2011 年 3 月)。該当頁 pp.59-64. 査読有
⑤吉水　千鶴子、「チャンドラキールティの論理学」『印度学仏教学研究』59-1, 2010 年 12 月 pp.(122)-(127) 査読有
⑥橘川　智昭、憐昭『無量義経疏』と円測『無量義経疏』」(『印度学仏教学研究』第 58 巻第 2 号、2010 年 3 月 20 日発行)。該当頁 pp.99-103. 査読有
⑦佐久間　秀範、「インド瑜伽行派諸論師の系譜に関する若干の覚え書き　－弥勒・無着・世親　－」『哲学・思想論集』第３５号（筑波大学　哲学・思想専攻）筑波、2010,3. pp.17-51.査読無
⑧吉水　千鶴子、"Źaṅ Thaṅ sag pa on theses (*dam bca', pratijñā*) in Madhyamaka thought." *The Journal of International Association of Buddhist Studies* vol.32, Number 1-2, 2009 (2010), pp.443-467.査読有
⑨ 吉水　千鶴子、"The Logic of the *Saṃdhinirmocanasūtra*: Establishing Right Reasoning Based on Similarity (*sārūpya*) and Dissimilarity (*vairūpya*)." *Logic in Earliest Classical India*, Brendan S. Gillon (ed.), *Papers of the 12th World Sanskrit Conference held in Helsinki, Finland, 13-18 July 2003* (General editors: Petteri Koskikallio & Asko Parpola), vol. 10.2, Delhi 2010 (January), pp.139-166.査読有

〔学会発表〕（計３６件）
①Albert C. Muller, "The Digital Dictionary of Buddhism [DDB]: A Model for the Sustainable Development of a Collaborative, Field-wide Web Reference Service." Symposium on Yogâcāra Resources at the Mangalam Center, Berkeley, CA, November 4, 2011.
②吉村　誠、『成唯識論』における阿頼耶識の譬喩について 第62回日本印度学仏教学会 2011 年 9 月 7 日、龍谷大学
③佐久間　秀範、'The Legendary Vasubandhu and the Kośakāra Vasubandhu' , XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, June 25, 2011, Dhrama Drum Buddhist College, Jinshan, New Taipei City, Taiwan
④吉水　千鶴子、'Non-implicative negation in Buddhist logic and early Tibetan Madhyamaka, XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, June 21, 2011, Dhrama Drum Buddhist College, Jinshan, New Taipei City, Taiwan
⑤Albert C. Muller、「円測『解深密経疏』における本質と影像.」、日本印度学仏教学会第 61 回学術大会 、2010 年 9 月 10-11 日、立正大学
⑥橘川　智昭、「唯識三転法輪説が想定した初時有教・声聞乗の意義　—『解深密経』・円測『解深密経疏』を手がかりとして—」、日本印度学仏教学会第 61 回学術大会、2010 年 9 月 11 日、立正大学
⑦佐久間　秀範、「無性と安慧の関係をめぐる覚え書き」、日本印度学仏教学会第 61 回学術大会、2010 年 9 月 10 日、立正大学
⑧佐久間　秀範、「瑜伽行者にとっての識と識の転換」、第 55 回国際東方学者会、2010 年 5 月 21 日、日本教育会館
⑨Albert C. Muller, "The State of Western Studies of Korean Seon Texts." *Early Chan Manuscripts among the Dunhuang Findings: Resources in the Markup and Digitization of Historical Texts*. September 28, 2009, Conference at the University of Oslo, Norway

〔図書〕（計２件）
①Albert C. Muller, "Wonhyo's Philosophy of Mind", Honolulu: University of Hawaii Press, 416 頁、2011 年
②吉村　誠、「唯識の思想史的意義」、奈良康明他編『新アジア仏教史』第 7 巻、99-119 頁、佼成出版社、2010 年

６．研究組織
(1)研究代表者
佐久間　秀範（SAKUMA HIDENORI）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：９０２２５８３９

(2)研究分担者
吉水　千鶴子（YOSHIMIZU CHIZUKO）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：１０３６１２９７

(3)連携研究者
Albert Muller
東京大学・人文社会系研究科・特任教授
研究者番号：６０２６５５２７

馬淵　昌也 (MABUCHI MASAYA)
学習院大学・外国語教育センター・教授
研究者番号：６０２０９６８２

吉村　誠　（YOSHIMURA　MAKOTO）
駒澤大学・仏教学部・准教授
研究者番号：６０２９８１０６

(4)研究協力者
橘川　智昭　(KITSUKAWA TOMOAKI)

東洋大学・東洋学研究所・客員研究員
研究者番号：４０５９９３８８

岡田　憲尚　（OKADA　KENSHO）
筑波大学・人文社会系・研究員